

SDGs を実現する教育としての ESD の真髄： 2050 年の教育への再想像

永田 佳之 (聖心女子大学 現代教養学部 教育学科教授)

11月19日 (土) 14:45~17:00 聖心女子大学 3号館1階 宮代ホール

<講師プロフィール>

聖心女子大学現代教養学部教育学科教授。博士(教育学)。同大学グローバル共生研究所副所長, 日本国際理解教育学会会長。

国立教育政策研究所の国際協力・研究部主任研究官などを経て2007年から現職。その間, 豪州フリンダース大学客員研究員, スリランカ・ペラデニヤ大学客員研究員などを歴任。同時に, ユネスコ本部の国際専門委員や選考委員を10年以上務めるなど, SDGsを実現する教育としてのESD(持続可能な開発のための教育)を国内外で推進する。日本国際理解教育学会の研究・実践委員会委員長並びに常任理事, 副会長を経て, 本年度より会長を務める。持続可能な社会と教育/ESD, 気候変動教育, オルタナティブ教育, 国際理解教育など, 多岐にわたる研究を行っている。また, 全国各地のESD実践校への助言や, 特定非営利活動法人フリースペースたまりば(えん)や学校法人アジア学院, 日本ユネスコ協会連盟の理事など, 保育・幼児教育から高等教育の現場においても研究の知見を還元している。第29回国際理解教育賞(最優秀賞)を受賞。

1. 『人新世』の光景

まず, このパーティンスキーの写真をご覧ください。とても著名な写真家です。私, よく授業でこれを使って学生を驚かしています。地球に対して, いかにも人間が大胆な影響を与えてきたのかということ伝えていっているのです。『人新世』という写真



写真1 EDWARD BURTYNSKY: 「ANTHROPOCENE」

のシリーズ, そこから取った一枚です(写真1)。イタリアの大理石の採掘現場です。

世界中でこういう開発が行われています。ほとんどが人間の痕跡です。人間の痕跡がないところはないと言っていいぐらいです。人間が初めて地質学的に世界を変えてしまったという時代が到来し, そろそろ新しい時代が来たのではないかと, 「人新世(ひとしんせい)」という名前をあてがったらどうだと議論が行われています。

今COP27が連日報道されています。気候変動に関する国際連合枠組条約の締約国会議がありまして, 今年はエジプトが会場になっています。

日本は今年も連続で不名誉な化石賞をいただきました。

地球はこれだけ困ってしまっている。知らぬが仏で楽しんでいるとどうなるかという, 気候変動または最近では気候危機です。気候非常事態という言葉もよく使われるようになってきました。言ってしまうと自業自得です。人間がこれだけの贅沢をしながら生活をしていたら, 自然のほうから襲いかかられてしまった。まさにコロナウイルスがそうです。森林の奥まで分け入って, 野生生物からのウイルスが逆に人間を襲ってきているということです。

そこで「教育」が大切だという認識はエジプトのCOP27の前からかなり重要視されています。気候変動教育なくして人類は生き延びられないという認識です。

環境危機時計を見てください(図1)。12時にな



図1 環境危機時刻 (旭硝子財団, 2022)

ると地球が終わっちゃうんです。どのくらい危ないかを測っています。92年、地球サミットがあった年で、希望が描けた時代です。その時は8時前です。2021年はもう10時前まで来ている。もちろん数分進んだり戻ったりもしますが、極めて不安である。「Extremely Concerned」のところまで来ている。2時間も進んでしまっている。分かっているのにやめられない、まさに人類はそれを続けているということなのです。

つの危機感として、最近では危機感の質も変わってきました。従来の環境問題は森林伐採とか土壌液化とか海洋汚染なので、まず何とか人間は対応できるんじゃないかということで今でも努力はしています。ところが最近の環境問題は気候変動とかウイルスなどですから、これらはアンコントロールです。何か怖いものが来ているんじゃないかということで、よく英語では「uncanny」、ちょっと不気味だという表現も使われるようになりました。近代の人間はコントロールできると思って社会を作ってきたのですが、どうやら違ったようです。

ティモシー・モートン（環境哲学者）がオラファー・エリアソン（アイスランド出身のアーティスト、自分の故郷アイスランドの氷がいかにか溶けてきているか、この10年、20年ずっと写真を撮っている）との対談で、モートンは「じきに人間存在が計算や政策や原理や哲学やアートなどなどあらゆることに非人間存在、non-human beingsを含めていかなくはならなくなります」と言いました。

これはコロナ前ですから、もう予見をしていたことです。実は多くの文学者も同様に述べていてわれわれが耳を傾けていなかっただけじゃないかと思うのです。特に、教育界はこのことを無視していたと私は思っています。

まさに今こういう時代で問われるのはイメージネーション（想像力）です。インド人作家A.ゴーシュの「The Great Derangement: Climate Change and the Unthinkable」、ここにパンデミックとか気候変動などの地球規模課題に翻弄されている現代社会の課題は、想像力の危機の時代であるとはっきり書いています。言うまでもなく、想像力を生かすのはアートですから、表現活動、舞踊も含めてその重要性が最近クローズアップされてきているということは間違いなく言えます。

2. ESDとは何か

今の若者は環境問題に対して漠然と不安を感じていると言われています。実際にエコフォビア（ecophobia）という言葉が広がっています。環境、エコの恐怖症です。どうやら何か大変な時代が来そうだと、何となく気付いていて、ひょっとした

ら科学者も政治家も誰も問題解決ができないんじゃないかという不安です。

アメリカのカウンセラーもそういう相談を受けていて、先生もそれに答えられないので先生がカウンセラーのところに行きます。なぜか。経験したことがない世代だからです。今の若者が多分最初で最後の人類的な危機を経験する世代になると言う人もいます。その世代が、先生どうしたらいいのかと相談に来ると、いや、先生も経験してないから分かんない。このように、何となく不安が広まってしまうのです。

教育は、私は希望の営みだと思っていますから、希望なくして教育というのは成り立たないです。頑張れ頑張れっていう空元気ではなく、重要なのはエンパワーメントです。こうしたプロセスをどういうふうに日本で作っていくかということを考えたいと思います。

この希望に向けたプロセスの大枠とも言える教育がESDです。日本は、実はESDを牽引してきた国です。小泉元首相は、ヨハネスブルクのサミット（2002年）で「日本は教育立国です。資源もない中、教育は大切なので世界を救うためにもこのESDをやしましょう」と言いました。ESDは、国連で2004年審議され、2005年からスタートしました。

坂本義和さん、有名な国際政治学者の言葉を借りました（『地球時代の国際政治』、1990）。「問題の地球性と問題意識の地球化」です。ウイルス、パンデミックや気候危機がそうです。まさにそういう時代の教育として生み落とされたのがESDです。

実は文科省はかなりESDを推進してしまっていて、ESDについて問題解決につながる地球規模、新たな価値観や行動などの変容、トランスフォームをもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指す（文部科学省HP）と書かれています。「Think globally, act locally」、ESDは「持続可能な社会の創り手を育む教育」です。これは学習指導要領の総則に全て入っています。これは結構画期的なことで、枠組みとしてはもう用意されています。現場がなかなか実践しないという課題はあると思いますけれども、政府は用意してくれています。平和で民主的な国家を、国民を作っていくことが教育基本法でも言われていますが、それに匹敵するほどの重要性を持っていると言えましょう。

ここにSDGsが出てきますが、第4目標の教育のターゲットの7番目、4.7にESDは出ています。全ての目標の実現に寄与するものであることが強調されています。

ESDはSDGsより先行型ですけど、SDGsが2015年に誕生して、SDGsのSD, sustainable developmentとESDのSDは一緒ですから、ESDに担ってもら

うことになりました。SDGsを実現していく教育としてESDは2019年に位置付けられました。

ESDは現行の学習指導要領においても基盤となる理念です。全体の内容に関わる前文及び総則において持続可能な社会の創り手、先ほど申し上げたことが掲げられています。これを放っておくか使うかは現場の教員次第だとも言えます。

国立教育政策研究所がESDを実現する、実践するために6つの視点「多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性」と、7つの能力・態度、「批判的に考える力、未来を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する力、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度」を示しています。これらはESDを実践しようとする学校にとって重要な役割を果たしてきました。実際にユネスコスクールというのが日本では1,100校以上認定されていて、ESDをやることになってきましたが、そこで教育実践を作る時、カリキュラム開発の時に参考にされています。

ESDのビジョンは持続可能な未来の創造です。目標は価値観 (value)、行動 (behavior)、生活様式 (life style) の変容です。この3つの変容が「ESDの10年」で強調して言われました。次はアプローチ、手法は変容をもたらす多様な学習法。国際実施計画 (International Implementation Scheme) という非常に重要な計画がありますが、そこには一方的なブロードキャストのようなやり方ではなくて、参加型そして学生、生徒の意思決定を重んじるような、まさに主体的な学習者を生み出す方法として演劇とかディベートとかも挙げられています。

コンテンツに関しては地球規模の課題です。ただし地球のことを学ばばいいかっていうとそうじゃなくて、今はローカルなことです。さっき「Think globally, act locally」とありましたが、現代ではローカルなことは掘り下げていくと、地球規模課題につながります。

まとめると、持続可能な未来を作るのはホリスティックな、包摂的、全体的な教育であって全人教育に近いと思います。そこでは知識のみならず情動・エモーションとか精神性・スピリチュアリティとか身体性とかが同等に重視されます。ただこれらは脇に置かれていたんじゃないかと。そろそろ本当の意味での全人教育を普通の公立学校で実現していかないと地球がもたないという危機意識があります。

歴史を振り返ると、「ESDの10年」というのが2005年からありました(2005年～2014年)。その後、そこで議論したことをちゃんと実践しようという提言を受け、5年間(2015年～2019年)グローバル・アクション・プログラムという期間を設けていま

す。それを経てESD for 2030というところまでできています。私自身はこのモニタリング評価専門家会合と、後は世界中のグッドプラクティスを選ぶ国際選考委員に13年ぐらい関わらせていただいて、この運動に関わってきました。

3. ESD for 2030のエッセンス

これからが最新課題です。SDGsを実現するにはこれを読んでくださいというロードマップ (Education for Sustainable Development : A Roadmap) があります。

図2は、気候変動のシナリオを表したものです。産業革命期と比べて気温の高さですが、1.5度のラインで抑えないと人類はもたないのに、このまま放っておくと2度、3度、場合によっては4度まで上がっちゃうと。グテーレス国連事務総長も、「今、我々は闘いの内にいるけど、勝てるんだ、本気になれば」と言っています。しかし、実際はもっと上がっちゃっていますから、人間はなかなか方向を転換できないできています。このロードマップにはSDGsのことについて細かく書かれていまして、この中心はやっぱり教育。ESDのような教育が大切であると国連は言っています。

主な課題は、変容が必要だということです。これは持続可能な未来への変容です。人類が生き延びるための教育です。Changeではないのです。changeは少し広義というか、ちょっと軽く聞こえることもあります。そうではなく、behavior, life style, valueを変えないといけないということです。何が大切で何がそうではないかという基準が価値観ですが、それを持続可能なほうに変えていくことが目指されています。

「disruption」という、これは非常に強い言葉です。教育にはあまり使われてこなかった言葉で、とにかく脱皮しなくちゃいけない。またはこれまでの慣習、因習を創造的に破壊する必要があります。現状の安全なところから飛び出してください。通例の思考、行動、生活様式から脱却、決別してください。なぜならばこのライフスタイルが地球を泣かせている。もうもたなくしているからです。国連の文書でこういうのが残るのは珍し

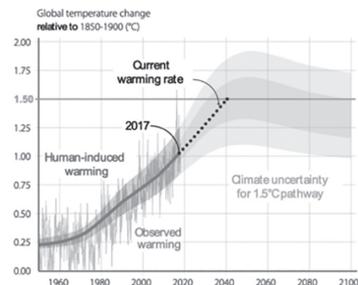


図2 How close are we to 1.5°C? (UNESCO, 2020)

いですが、求められるのは勇気と忍耐と決断ということが書かれています。今までにない厳しさを持って書かれていますので相当な危機感です。

ESDの存在意義（レゾンデートル）は、開発そして持続可能な開発自体を批判的に問うことだとも書かれています。持続可能な開発ってSDGsのSDですよ。それを実現するのがESDです。要するに自らの目標自体も疑えと言っています。

1つは開発（development）です。これは価値ある理念として今まで使われてきました。国連の10年というのがあって、開発の10年が続いていました。人間を豊かにして貧困から救おうということです。しばらくして環境問題が出てきます。そして開発の在り方というのを考えなきゃいけなくなってきた。それで出てきたのがSustainable Developmentです。持続可能に開発をすること。脱成長、脱開発、要するに右肩上がりの社会じゃない在り方があるっていいんじゃないかということです。

消費社会からの見直し。ライフスタイルの変容が鍵です。ライフスタイルの選択への批判的思考。例えば何か消費するにしても商品の裏側を見ることがとても大切になります。コンビニでわれわれが何か買う時にその裏側には児童労働や環境破壊があるかもしれません。森林破壊、森林火災が引き起こされているかもしれない。ライフスタイルそのものへ厳しい批判的思考を生かさなくちゃいけないと書かれています。

質の高い教育をしてほしい。認知的な側面、cognitiveと書いてありますけれども、社会情動Social and Emotional、感情的そして社会的な学びも重視されています。

もう1つは行動的な側面。要するに知的側面だけではもう立ちゆかなくなっているということです。知識だけ身に付けてテストでそれを吐き出して終わりという時代はとくに終わったという認識です。Sustainabilityの文化。Culture of Sustainability、それを定着させていこう、創っていこうと言っています。どうやって創ったらいかというのは、教育の課題です。



図3 社会と連動するESD（講演資料より）

まとめて言うと、社会と連動しているのは教育ですから、図3にある価値観が左のほうから右のほうに変わっています。例えば、スピードよりスロー。競争より協調。お金より心、文化。物欲より節制。機械、人工的より自然、命。切り捨てよりケア。複雑よりシンプル。一極集中よりも多様性。環境破壊よりも自然との共生。乱開発よりも持続可能な開発。独占よりも分かち合い。結果よりプロセス。見えるものよりも、精神性とか見えないもの…。

今までは多くの知識を持っている先生が重視されてきました。子どもの質問に答えられる先生は、正答マシンじゃないですけども重要だと。何を聞かれても答えを言える。それが変わってきて、正答のない教育、答えのない教育。例えば、人間はなぜ生きるのかとか、哲学的な問いを大切にしている先生が重要なのではないかということです。

強い、強そうに振る舞える先生には頑強な身体性、指導的な姿勢が見受けられます。確かに先生方の身体性っていうのは強いのが前提になっているようなところがあって、どうしても指導的な姿勢を持ってしまう。まとめてしまったり、引っ張ってしまうという場面が多いですよ、今でも。そうじゃなくて、等身大の先生で柔軟、受容的な身体性、傾聴の姿勢が大切なのです。先生は何でも聞きなさいとか言いながら、もう存在自体が聞くなって言っているような矛盾があったりする。傾聴の姿勢を持つということです。成長する先生ももちろん大切ですが、それだけじゃなくて変容する、トランスフォームする、価値観が教員になっても変わっていく。そんな柔軟な姿勢が重要だと思います。

4. 2050年の教育への再想像 （ユネスコ最新報告書）

ここまでが今われわれが生きている2020年代で目指されていることで、これに基づいて実は文科省など、さまざまな組織が色々なプロジェクトを打ってきています。だけれどもユネスコは去年それを超えるようなレポートを出しました。そこでのキーワードが2050年への「reimagination、再想像」です。この言葉を使わなくちゃいけないぐらい想像力をもっと先に巡らせないと人類は危ないという警鐘でもあると私は捉えています。

これらがユネスコが戦後出てきた有名なレポートです（図4）。

1本目は72年に出た「learning to be」です。これはlearning to have、持つため、所有するための学びが席卷をし始めた70年代の経済成長の時代に出されました。その時に、いやいや、教育っていうのは人間存在を深める、人間になるための教育なんだと。それなくしてlearning to haveだ

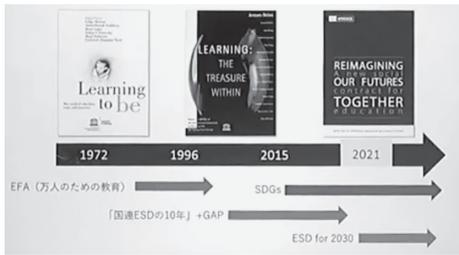


図4 ユネスコの報告書と国際教育の潮流
(講演資料より)

けどと非常に危険だと。当時、日本はエコノミック・アニマルとして揶揄された時代でもあります。4本柱とは、1本目はlearning to know, 知するための教育。2本目がlearning to do, 成すための教育。つまり、知識とスキルです。3本目がlearning to live together, 共生。一緒に暮らす。4本目がlearning to beで、しばしば一番重要だと言われます。それを表したのが図4の真ん中のレポート「Learning: the treasure with in」です。

特に現代社会、グローバル化している社会ではlearning to live togetherとlearning to beが大切だとユネスコは指摘しています。まさに今の危機的状況の地球においてはこの2つが問われているのだと思います。また、これらのレポートからLife-long Educationという概念も生み出され、それなりに影響力があったんです。

去年、11月ユネスコ総会で出されたレポートのタイトルが「Reimagining our futures together」, 私たちの未来を共に再想像する。副題が「A new social contract for education」, 教育のための新たな社会契約です。

日本語タイトル「私たちの未来を共に再想像する」ですけれども、非常にシンプルなことを言っています。予測困難で不確実性の時代には、今学校などあらゆる組織で「何をやるべきか」を話し合っ、持続不可能にしてきたものをまずやめましょうと。2番目に「何を残す」べきか。3番目に「新たに作るものは何か」。この3つを世界のあらゆるところでディスカッションしてください。それで世の中の対話を豊かにしていこうと。そうすると教育は持続可能な未来のほうに行くんじゃないかというようなシナリオがあります。

実際、学校でこのワークショップをやりますと、先生たちめちゃくちゃ盛り上がります。例えば、2050年にもあってほしいものとかなくていいものとかやると、持続可能な未来への価値観が見えてくるんです。ぜひ皆さんもワークショップをやってみてください。

もう1つ大きなメッセージがあって、副題の「social contract」。これは社会契約論、ジャン＝ジャック・ルソーを思い起こす人は多いと思いま

すが、そうじゃなくて新しい社会契約論です。1つは自然との社会契約です。これを今新たな教育を通して結び直さないと地球はもたない。

もう1つは人間同士。これはユネスコが設立当初から言っていました。世界大戦が終わって戦勝国がロンドンに集まって、もう二度と、ヨーロッパなどを焼け野原にしないように戦争を起さないようにしようとして話し合ったんです。そのためには教育が必要だという結論です。教育だけじゃなくて、教育、科学、文化も必要だということで国連教育科学文化機構、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, つまりUNESCOが生まれました。

当初からその前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を作る」という有名な一文があります。実はこれ、アメリカの詩人が作ったと言われてます。「Since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defenses of peace must be constructed.」そのためにユネスコは平和のための教育、国際理解教育を始めました。それをずっとやってきたにも関わらず9.11は起こるし、挙げ句の果てにはウクライナ侵攻も起きてしまうし、ここはもう本当に正念場だと。どうしたらいいのかという問いです。

もう1つ、前の2つのレポートにはさほど危機感がなかったのがテクノロジーです。どうやらテクノロジーは人間を超えるらしい。AIの時代になっていく。その時に人間の教育というのは何なのか。想像できないと思いますけれども、将来体育とか音楽をロボットが教える。またはAIが教えるという時代は多分来るのかもしれませんが。みんな1人1台タブレットを配るようになりましたけれども、その中身や影響についてきちんと検討していないというのが世界中で起きています。以上の3つの関係性をどの教育分野の専門家も、どの教科の専門家も捉え直す。そんな時代だということですよ。

このようにユネスコの最新報告書では、人間と自然との関係性が問われます。近代では人間は自然をコントロールできると思っていました。キリスト教でも人間が管理をするという考えが強いと思うんです。確かに近代を人間は作ってきたわけですけど、その結果、いろんな問題が起きました。生物多様性はなくなるし、気候変動が起きて人間に襲いかかってきています。

人間は確かに一部の自然はコントロールできたのかもしれない。だけれどもここに人間界を超えた、<人間ならざるもの>, non-human beings 人間界を超えた世界more-than-human worldがあり、新たな共生が求められています。

どうやったら左から右側にシフト(図5)し

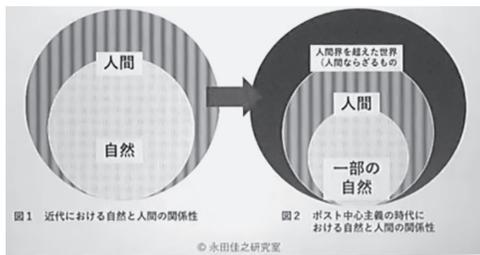


図5 人間と自然の関係性（講演資料より）

ていくか。これが今、保育、教育で問われている問いです。「nonhuman turn」＜人間ならざるもの＞の出番が来たとRichard A. Grusinが著作の標題にしていますが、気候変動、干ばつ、飢餓、21世紀に直面する大半の問題はnonhuman beingsたちとの関わりをもたらず。グルーシンは、「これからは気候、動物、病原菌など他者と創造的な関係性を結び、われわれがコントロールするという人間中心主義とは異なる世界の在り方を探らねばならない」と言っています。まさにユネスコが最新レポートで言ったことをコロナになる前からこういう人たちは言っているわけです。

図6は、私が作った図です。蚊取り線香の図と呼んでいます。真ん中に「日常」があり、われわれはせめて2周目ぐらいで生活しています。つまり人間中心や子ども中心でなくてはならない、という理想を「想像」して日々暮らしています。でもそのイメージーションだけではもう世界は続かないと。その先は何かと言うと、ぐるっと回って全ての命中心です。つまりnon-human beingsもここに入れないといけないということです。この「人間ならざるもの」には、アフリカの動物とかだけではなく、ウイルスも気候変動も全てです。＜人間ならざるもの＞全てをイメージして教育を創ってくださいということです。

もう1つは、例えば、子どもの健康は大切だと。つつい大人に合わせて夜更かしをしまして、子どもも寝不足だと問題になる。そして子どもと健康というのは重要なトピックと「想像」します。だけでもそれを超えてPlanetary health, 地球の健康と自分の健康、人間の健康が相互依存的な関



図6 ポストコロナ時代への再想像（講演資料より）

係にあるということをきちっと学んでいかななくてはならない。

今の教育は現代社会をどうにか子どもにとって健康にいいもの、ウェルビーイングを作ろうと一生懸命。でもそこ止まりではなく、その先へ行ってください。さらに、アクティブラーニングは現場でも知られるようになりました。だけでもそうじゃなくて、立ち止まって考える。アクティブのようだけでも実は非常に表層的な学びがあります。そうじゃなくてDeep Active Learning, まさに価値変容を迫るような学習方法でなくちゃいけない。またはPBL, Project BasedまたはProblem Based。地球規模課題とかの問題。またはそれを解決するプロジェクトに基づいた学びです。そこにとどまっていたはいけなくて、問題を作り出さない社会作りは何なのかを考えなきゃいけない。知識中心よりもこれからお話しするSEL, Social and Emotional Learning, 社会情動的な学びなどなのです。

皆さんに、ぜひ舞踊研究、舞踊学で図中の「??」は何なのかということをお話したいと思っています。これは舞踊学だけではなく、もう全ての学問に問われていることです。2050年の問いとして全ての人類社会、われわれに突き付けられている問いだと思います。

5. 持続可能性の原理・原則

次に未来が見えてくるような学校を紹介します。当時、リチャード・ダンという先生が校長をしていた学校です。普通のイギリスの、レッドブリックス、レンガ造りの普通の学校です。しかし、中身は革命的で。私、何百って学校を見てきましたけどすごい学校です。校長が、2度も南極に行っています。そこで気候変動の影響を見てきた。何か大変なことが地球に起きているんだと。それを感じ取る感性がすごいと思いますけど。もっとすごいのは、ああしなさい、こうしなさいって政府や人に言うんじゃないで、自分の持ち場を革命的に変えたということです。エネルギー、衣、食、全て生徒が目にするもの、生徒が触れるもの、体験するもの全てがサステナブルなのです。ハード面だけではなく、朝礼から修学旅行まで全部変えました、地球にいいように。こうした方法を、ユネスコは「ホールスクールアプローチ」と言っていますが、ダン先生の学校ではユネスコが言うよりも早くやっています。問いを中心とした探究学習、根源的な問い。それを彼は「Inquiry-based Learning」と呼んでいます。

この写真の人は、皆さんも見たことがあるかもしれません。チャールズ国王です。チャールズ三世。彼が『ハーモニー』という著作を科学者と一緒

ているというふうに絶賛を国王自身からされました。『ハーモニー』という本のタイトルですが、とても高貴な英語でなかなかこれは訳せない日本語です。副題は「A New Way of Looking at Our World」と書いてあって、私たちの世界の新しい見方です。パンデミック時代の教育の指南書じゃないかというふうに思われるような内容です。

それを教育に応用したのが先ほどのリチャード校長です。6つの原則です。「相互依存, interdependence」が持続可能な未来を作る原理原則の1つ。教育は自立しろというふうに今まで言ってきたのがそうじゃないと言うんです。これを舞踊学でどういうふうに教えるのか分かりませんが、森にはたくさんの相互依存を見出すことができます。これを人間社会も見習おうというのがメッセージです。他にも自然界に見出せる循環, 多様性, 適応, 健康。そして「ひとつらなり」は私の訳で, onenessです。これらを大切に教育の礎にしようということです。

今の6原則を中心に何を食べるか, 飲むか。エネルギーをどうするか。ごみ, 修学旅行, 遠足, 行事, 校舎校庭, 素材とか。朝会, 地域, 生徒会, 職員会議全てを変えています。キーワードはハーモニーです。学習はone of themです。教室での授業が勝負だというのは日本の教育で非常に強いと思います。とても良いことだと思いますが、ホールスクールの視点からすれば, それはone of themだということです。

SDGsで問われているのは, 私たち大人の本気度です。教室で大切だと言っていることを教室以外で実際にやっていないと, 子どもは先生, 嘘ついていると思うようになります。例えば, 水を大切にしろ。電気を大切にしろ。殺生をするな。いろんなことを言いますが, 先生, 教室外に出たらやっているでしょうか。いや, やってないと。子どもは分かっています。でもこの矛盾をできる限りなくしていく。学校でよしとすることを, まずは学校で実践をするということです。

教室の一步外に出ると子どもたち, 学生たちが目にするのは矛盾だらけです。先生が教室で教えている価値観と違うことを大人たちは作ってきたことが分かります。それを完璧じゃなくてもいいので少しでも変えようとしている, そういう大人を目の当たりにするかどうかで持続可能な未来へのつながりは決まっていくと私は考えています。

今のここに6つの原則があります。特に日本人の場合は森に親しみがあるので, そこにはこれらの原則を容易に見いだすことができます。そこから学ぼうということです。例えば, 縦糸は循環, サイクルとかダイバーシティとかインターディペンデンスです。横糸は信頼, 感謝, ケア, 公正とか他にもいろいろあるんですけども価値観です。

自然界と同じように人間界にもこういう価値観に重きを置く, 日本で言うと道徳教育になるかもしれませんが。それを実際に織り込んでいこうということです。自然界の持続可能性と人間界の持続可能性。テクノロジー以外の2つ, 社会契約をうまく織り込んでいるような実践です。

実際に私もこれに倣いまして, 山梨県にある「ぐうたら村」管理人の小西貴士先生と一緒に, 定期的に森でワークショップをやっています。

ここでは「循環」について学んでいます。幼稚園の先生, 園長さんとか多いですけど, 死んでいる木は死んでいるんじゃないんだと。次に命をつないでいるんだということがここで分かったり, いろんな発見をしてもらっています。森の中で物語を作ってもらったり, ここで朽ちたものがこの人たちの口に入るまでの物語を今作っているわけです。教育全般で非常に評価が重んじられるようになっていて。子細なチェック機能に先生もそして生徒もおびえている。非常に危ないと思います。もう少しこういう原理原則に細かな部分を委ねることによって, 現場がおおらかになるんじゃないでしょうか。

世界は不条理に満ちている。今の子どもの世代は何も悪いことをやっていないです。われわれが産業革命以降にCO2を出し過ぎたわけですから。なのに, 自然界から私たちに襲い掛かってくる。そういう時代です。でも, ならば表現しようということで, 社会情動学習 (Social and Emotional Learning) は大切だよっていうことを言い始めています。

次の図7を見てみます。認知スキルはthink, read, learn, reasonであるの対して, こっちはcompassion。社会情動はempathyとかmindfulnessというのが重要になってくる。まさにここには心と身体もつながっているわけです。こっちのほうに教育はいかなくちゃいけないんじゃないかっていう流れがあります。

思いやりとか共感とかマインドフルネスとか批判的思考など…。ここは知的な営みも大きいですが, それらが統合的にカリキュラムに組み込まれるのが望ましいということも言っています。

私はこの手法を気候変動の授業で使っています。気候変動の実際の写真を見せ, データを示すと学

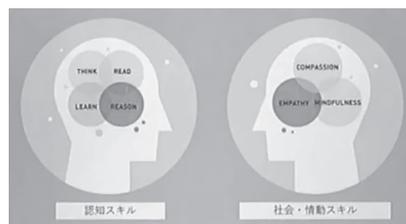


図7 認知スキルと社会・情動スキル (講演資料より)

生は失望します。もう間に合わないと言います。1年間に4万種の生物を人間が消滅させますから。この世の中から、地球上から淘汰してしまっている。だけど教育は希望の営みじゃないといけないと思っていますので、学生同士で不安な気持ちを共有したり、世の中捨てたもんじゃ無いっていう大人たちの「本気」を伝えたりします。例えば、利益よりも「地球益」を重視しながら経営しているパタゴニアという会社やそのユニークな経営の意味について共有したりしています。

他には、未来を担う世代同士で学んでほしいということで気候変動の詩を作ってもらって共有します。これは学生が作った詩です。

今日も私は燃えている。緑さざめく葉は赤く染まり、青く澄んだ空は赤黒く変わる。今日も私は溶けている。広大な白い地は青く変わり、白銀の世界と呼ばれた場所はもうそこにはない。私は来る日も来る日も訴えた。怒りで大地を焼き払い、悲しみの涙を出した。(中略)私は時々分からなくなる。終わりはあるのか。いつまで続くのか。自分が誰のものであるのかさえも。しかし私は知っている。あなたの声にはきっと国、世界を動かす力があることを。私は変われるということ。さあ、私が壊れてしまう前にあなたの力強い声を聞かせて。

この「私」はもちろん地球です。もう一つ、これは右から読んでも左から読んでも読める詩です。これは私の研究室のホームページからダウンロードできますので、もしよかったらゆっくりと読んでください。

次に示すのは自然保育の冊子に寄稿した私の文章の一部です。

私たちは今、人新世と呼ばれる新たな時代を生きていると言われています。それはこれまでにないほどに人間が地球の生態系に影響を及ぼすに至った時代であり、このままその影響が進むなら温暖化による自然災害を見て分かるように取り返しのつかない壊滅的な被害に人類は見舞われるであろうと指摘する。日本を含めた各国政府はこの段に及んでようやく重い腰を上げ、20年までに120カ国以上の政府が温暖化の主な原因であるCO2排出量を実質ゼロにする宣言をするに至りました。今、石油などの化石燃料に依存していた経済成長重視型の社会から脱炭素型へのシフトが急速に始まっています。同時に私たち保育、教育者も同様の方向へのシフトが求められています。自然保育はこの意味において先駆的な実践を紡いできたフロントランナーであると言えるでしょう。ただ、人新世の時代においては従来と同様に自然との共生を掲げて実践することで事足りるかどうか問われているよう

に思えてなりません。ここで問われなければならないもの、単に自然に親しむというのは異なる関係性の創造という課題に保育界、教育界も直面しているのではないかということです。人新世という時代の特性を考えた場合、それ一般に自然保育で重視されている自然環境や地域資源を活用した保育を超えて、保育が前提としてきた生態系を広げることも必要となるでしょう。時には人間には制御できないような大いなる自然に抱かれて、時には大宇宙の摂理に感性を開いて、はたまた小宇宙と呼ばれる私たちの体の中に宇宙と同様のリズムを感じ取ったりする。そんなダイナミックな保育が求められているのだと思います。さて皆さんの現場ではどのようにこれらの育みにチャレンジしますか。

と書かせていただきました。

6. ヒューマンズとノンヒューマンズの境界

<人間ならざるもの>を視野に入れていなかったという意味で、教育が遅れていると非常に失礼なことを今日は言いましたが、ここで教育界以外でこの課題に挑んでおられる方々の作品を紹介します。

この写真は新進気鋭の建築家、田根剛さんの構想です。パリに事務所を構えている有名な建築家です。彼がオリンピックのスタジアムの案を作った時、ぶったまげました。これは古墳スタジアムです。この近くの明治神宮を彼は調べて、実は国民運動として各地方からの樹木を明治神宮に植えて、あの生物多様性の豊かな森を創ったわけです。まさにこれが未来型のオリンピックスタジアム。

こういう表現もあれば、大小島真木さん。彼女は土ということに注目しています。舞台芸術もなさっていて、例えば、土、「フモス」っていうのは腐植土っていう意味で、人間のヒューマンと語源が一緒です。そこに注目して人間と土、腐植土というテーマにこういう作品を創ったり、舞台芸術を創っています。

まだお若いですがけれども小林雅子さんです。この前展覧会に行ってきたんですけど、彼女の創作の背景にある「想い」の一端を紹介します。

「今は超えたのに、今を超えた後に始まる別の時間。物語を創造するとその世界すでに足下に大きく広がっていることに気付く。私たちは誕生から寿命までの時間を1本の直線のように感じて生きている。直線の時間の終わりには全てのが土へと還る。土壌はすでに死んだものたちからなり、温かい場所である。毎年積み重なる草の遺骸で腐葉土ができ、草の根でゆっくりと土が耕され、鳥が糞と共にまき散らした種から新しい芽が出る。そこから始まる世界では緩やかに混ざり合い、繰

り返され、終わりのある直線ではなく樹木の年輪のように円を描きながら深く豊かに広がっていく。果てしない時間を掛けて形成された命の円の薄皮を削りながら私たちはこの世界に何を作り出そう」

特に若い方の感性は本当に素晴らしいと思います。予測困難な時代にいかに希望の営みを作れるのかというのが教育者と保育者に問われているのだと思います。

7. 門外漢からの問い

最後に、私はド素人ですので、皆さんに本当に失礼な問いになるかもしれません。ちょっと寛容に聞いていただいて素人ならではの舞踊に関する素朴な問いを共有して結びとさせていただきます。

- ・舞踊は<人間ならざるもの>、non-human beingsをどう表現してきたのか
- ・現代舞踊は自然との調和をどう表現しているのか（環境と共生する身体性の表現）
- ・舞踊研究は環境問題をどのように扱ってきたのか
- ・舞踊は気候変動などの地球規模課題をどう扱うのか。または扱っているのか
- ・舞踊研究は地球環境の危機にどのように向き合っているのか
- ・舞踊研究は伝統的な民族舞踊の世界観をどのように現代に生かそうとしているのか
- ・舞踊研究は未来の他者への想像力をどう扱うのか

これらに加えて、ユネスコ報告書からの問い掛けを3つ示します。

- ・学校などにおける舞踊の教育実践に新たな3つの「社会契約」を取り入れる必要はあるのか
 - ・もしあるとすればどのような表現方法やアプローチが有効なのか
 - ・そうした実践の課題は何か
- ご清聴、有り難うございました。